

安土町地域自治区長便り

NO. 17 (平成 23 年年 4 月 26 日)

発行 安土町地域自治区事務所
(安土町総合支所)

<第 10 回地域協議会>

4 月 11 日 (月) に地域協議会定例会が開催されました。案件は、先進地研修の総括と、市民バスや福祉自動車の近況報告でした。

今回は、合併して 1 年が経過するにあたり、「合併後の住民サービスの変化」について、市から報告しました。

さらに、学区まちづくり協議会の取り組みに関し、「まちづくり支援交付金」や「自治会の組織変革」について意見交換がおこなわれました。



<官・学・産が知恵を出し合って>

4 月 15 日、これからの地方自治のあり方を探るため、滋賀県立大学・近江八幡市商工会議所・安土町商工会そして市による、四者連携の協定調印式が商工会議所で行われました。

こらからの近江八幡市の新たなまちづくりのシンクタンクの担い手として期待されます。



<自治会長連絡会に 38 自治会初顔合せ>

4 月 15 日 (金)、市長を迎えて、平成 23 年度安土町地域自治区自治会長連絡会が開催されました。

新しく東西南北の 4 ブロックから各 1 名の代表が選出され、役員が決まりました。

この日の案件は、社会福祉協議会の協力、あづち信長まつり、行政事務委託、まちづくり支援交付金、自治会要望、年間の主な行事等で、2 時間あまりの会議でした。



▲地域自治区各機関の代表者等の紹介



今年度の会長は安居昌廣さん (下豊浦)、副会長には、深尾増男さん (西老蘇)・熊木清一さん (常楽寺)・西村俊明さん (衣笠台) が選出されました。

なお、昨年度の会長の水音治郎さんは、顧問として残っていただくことになりました。

<市長が被災地・南相馬市を視察>

4 月 17 日 (日) 午後 6 時、市長と 4 人の部長が、救援物資の搬送と、南相馬市長と今後の援助の方法等を協議するため、被災地・福島県南相馬市へ出発しました。



▲出発前の市長と部長

<ホタルの里事業>

老蘇の森にホタルを取り戻そうという地元の計画に基づき、この度、太陽光発電設備で川から水をくみ上げて清流を作り出す事業が始まりました。



▲川から水をくみ上げた小川

<クラシックカーがやってきた>

4月19日に「ラ・フェスタ・プリマベイヤ」が文芸の郷でありました。あいにくの雨天でしたが、多くのクラシックカーファンが集まりました。



▲堺正章さんの車

<視点>

・大震災の中で、まちの「結い」を取り上げた記事が目に入った。巨大地震と大津波によって、行政が壊滅的な打撃を受け、機能しなくなった事態に対して、小さな隣近所の若者や女性の方々、高校生のボランティアグループが立ちあがって、復興の一步を踏み出したとのこと。

・「地域からの挑戦」（岩波ブックレット No520）の中に、「過疎地域をマネージメントしていく能力は何か。まずは、住民が、他人まかせ、行政まかせを脱し、自らの知恵と汗（時には金）を出し合い共同で何かに取り組むことである。そして、地域の近い将来について語り合い、地域の未来について計画を描き出すことである」とある。

・鳥取県智頭町の「ゼロ分のイチ村おこし運動」の取り組みについて。まず、「村の誇り（宝）の創造」が運動の目的。この目標に向かって行政任せでなく住民自らが能動的に「計画策定」をする。

・具体的には集落の生活や文化を、「地域経営」の観点から、しかも「国内外との交流」を考えながら捉え直していく。それを通じて「住民自治」の姿勢を育てていくとある。

・安土地域の今年度の自治会長・区長が決まった。その長だけが自治会の色々なことを切り盛りするのは大変である。

・それぞれの自治会に、多くの方が参加し、課題を出し合い、自分たちの自治会の誇りをどのように創造するか、語り合うことが大切になる。

・しかし、この住民の集まりがなかなかできないのが実態で、ゼロからの出発も考えられる。まず、無から有への一歩こそまちづくりの挑戦になるのだろう。この意識改革で、智頭町は過疎の危機を乗り越えた。

・安土地域の自治会も身近な話題をきっかけに、自分たちのまちは自分たちの手で作り上げるという取組みや、文化・伝統という誇りを再生するような一歩を自治会の方々に期待したい。

・総合支所も、こうした地域づくりのために安土地域で研修会や講演会を計画している。

・合併して2年目、安土と老蘇の「学区まちづくり協議会」への準備を進めていこうとしている。みらい創りへの一歩となるよう、走りながらではあるが、考えていかなければならない。

・そして、自分たちの地域の宝を創り上げていただきたい。